連載

ベートーヴェン的な余りにベートーヴェン的な

Like BEETHOVEN, All Too Like BEETHOVEN

vol.5

◆Guest◆

フランソワ=フレデリック・ギィさん

ベートーヴェンの生誕250周年記念となる2020年、演奏家たちにとってのベートーヴェン像をたずねていく本連載。第5回のゲストは、昨年11月から12月にかけて武蔵野市民文化会館でベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会を行い話題となった鬼才、フランソワ=フレデリック・ギィさんをお迎えしました。

彼のピアノ・ソナタは一種の「自伝」です

取材・文=越懸澤麻衣
Text by Kiriko Koshigoe
写真=堀田力丸
Photo by Rikimaru Hotta

フランスが誇る「ベートーヴェン弾き」であるフランソワ=フレデリック・ギィ。次回の来日が待ち遠しい

ようやく時代が追いついたベートーヴェンの新しさ

——今回のベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会について、そのコンセプトをお聞かせください。

ギィ(G)　このプロジェクトの醍醐味は、聴衆にベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲を非常に短い期間でお示しすることです。そうすることで、聴衆はこのユニークな音楽的業績をよく感じることができると思います。彼のピアノ・ソナタは一種の「自伝」です。そして、それまでに誰も書いたことのないような音楽であると同時に、その後の音楽家たち——とくにロマン派のシューマン、ブラームス、ブルックナー、マーラーなど、あるいはブーレーズさえ——に非常に大きな影響を与えた音楽です。音楽史を変えた音楽と言っても過言ではないでしょう。ベートーヴェンのピアノ・ソナタはとても複雑で演奏するのも難しいですから、ベートーヴェンの時代にすべてが理解されていたわけではありません。それができるようになるまで、250年近くが必要だったのだと思います。とくに後期作品、「第29番《ハンマークラヴィーア》」などは、今でさえ複雑に感じられます。ベートーヴェンは非常に「モダニスト」だったということですね。

——ピアニストとして、ベートーヴェン作品はどのようなところが特徴的だと思いますか。

G　全曲を演奏してみて感じることは、「すべての作品に何か新しいことがある」ということです。それはピアノのテクニックに関しても言えます。最初は非常に

ハイドンらしいところからはじまります。ハイドンよりももっと荒々しいですけれど。たとえば「ド・ソ・ミ・ソ」というようなアルベルティ・バスを、ベートーヴェンも初期は用いていましたが、徐々により複雑な伴奏音型になっていきます。彼はピアノの語法を拡大させたのです。それから、独特な沈黙を要求すること。これは先週の演奏会でも経験したのですが、奏者も聴衆も集中して耳を澄ます、そんな瞬間が訪れるのです。突然、地面が消えるような、不思議な感覚になります。

――ところで、ベートーヴェンのソナタを演奏するときに、どの版の楽譜をお使いですか。

G　クルチ版です。イタリアの楽譜でアルトゥール・シュナーベルが校訂したものです。いつもこれで練習しています。私の考えでは最良の版で、生徒たちにも勧めています。ここには非常に多くのコメントが書いてあり、そこから多くを学ぶことができるからです。

――楽器についてうかがいます。ベートーヴェンの時代のピアノと今日のピアノとではずいぶん違うわけですが、その違いをどのように捉えて演奏していますか。

G　当時の楽器を意識しつつ、現代のピアノの良さを活かす、という感じでしょうか。私たちは今のピアノで弾くわけですから。それでも、ベートーヴェンの時代の楽器にどういうことが可能だったのかを考慮に入れることも必要です。もっともベートーヴェンにどこまで聴こえていたのか、という難しい問題もありますが……。特に、強弱の幅には気を付けています。当時の♩は今の♩ほどの大音量は出ませんでした。

大切なのは、ベートーヴェンのペダル記号を守ることです。たとえば「第14番《月光》」第1楽章。ただし、私は「ペダルを踏み変えずに踏み続ける」という意味ではないと思います。ここで新しいことは、楽章を通じてウナ・コルダとダンパー・ペダルの両方を使うということです。そうすることで、新しい響きが、たとえばモーツァルトの音楽とはまったく異なる世界が広がるのです。それから「第21番《ワルトシュタイン》」第3楽章の冒頭でも、ペダルを踏み変えて「クリアな」響きにしては、神秘的な魅力が台無しです。書かれた音を書き替える人はいませんよね。それと同じで、ベートーヴェンのペダリングも書かれている通りに弾くべきだと思います。

――もしベートーヴェンに会うことができたら、どのようなことを質問してみたいですか。

G　……「どうしてそこまで深く人間のことを理解できたのか」と訊いてみたいです。でもきっと、「それどういう意味？別に私は人間に興味ないけど」なんて答えられてしまいそうですけどね（笑）。

フランソワ=フレデリック・ギィ
Francois-Frederic Guy

1968年生まれ。パリ国立高等音楽院でドミニク・メルレ、クリスティアン・イヴァルディに師事し、首席で卒業。レオン・フライシャー、マレイ・ペライアらのもとでも研鑽を積んだ。1999年のデビュー録一躍注目を集め、フランス国内外を問わず活躍しているピアニストである。ドイツ・ロマン派、とりわけベートーヴェンのスペシャリストとして知られ、ライヴ、録音ともに高い評価を獲得している。2019年11月から12月、全9回にわたるベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会シリーズを行い、脚光を浴びた。

インタヴュー中、実際にピアノを演奏して、譜面に書かれたベートーヴェンの「意図」を説明してくれたギィ

CD

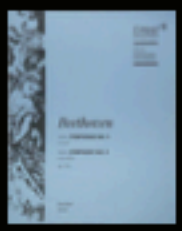
ベートーヴェン
「ピアノ・ソナタ全集」
（第1〜32番）
[Zig-Zag Territoires ZZT333（海外盤）]

ベートーヴェン
「チェロとピアノのための作品全集」
［共演：グザヴィエ・フィリップス（vc）］
[Evidence EVCD015（海外盤）]

ベートーヴェン
「ヴァイオリン・ソナタ全集」
［第1〜10番］
[Evidence EVCD037（海外盤）]

私のベートーヴェン――お気に入りの1曲

◆交響曲第9番《合唱》ニ短調 op.125◆



「交響曲第9番《合唱》」です。日本人のようですが（笑）、非常に深く、重要で偉大な作品です。とはいえ、「最も好きな1曲」を選ぶというのは、難しいですね。ベートーヴェンの交響曲すべてと32曲のソナタ、弦楽四重奏曲すべて、《ミサ・ソレムニス》に《ディアベッリ変奏曲》。ほんとうですよ！　一つに選ぶなんて不可能です。どんなに小さな曲でさえ、ベートーヴェンが書いたものに二流の作品はないと思っています。